

# 多文化背景を地域で活かす

## ブラジルと日本

タカノ・ヴィオレッタ・ミサキ

# 自己紹介

- ブラジル、アマゾン川河口近くの都市ベレン出身
- 日系二世ブラジル人(ブラジル国籍)
- 1996年 留学生として来日

**学歴:** ブラジルと日本の両国で複数の大学にて、理学、建築、美術、教育を学ぶ。

**職歴:** ブラジルでは日本語教師、農学関連通訳。日本では、教育委員会、書店、図書館、遺伝子研究機関、国際交流会館にて職務経験あり。ポルトガル語講師、翻訳。

# 現在の生活

- 日本で、中国北京出身の夫と結婚。
- 長男(8歳)、次男(4歳)、三男(妊娠中)
- 家族4人で(10月に5人になる予定)伏見区に暮らす。

## 京都での国際交流活動

京都府名誉友好大使

京都市国際文化市民交流サポート委員(タブサポ)

京都市国際理解プログラムPICNIK

# 多文化共生事例報告

報告者：タカノ・ヴィオレッタ・ミサキ

報告者の個人的な体験に基づく多文化共生事例報告

1. ブラジルでの体験
2. 日本で留学生としての体験
3. 在日外国人市民としての体験

# 1. ブラジルでの体験

- 1980年代、アマゾンの奥地の村で幼少を過ごす
- 現地の小学校に通い、週末は日本人が多く住むトメアスー(日本人植民地)で日本語を学ぶ。
- 1980年代トメアスーでは日本人移住者による、日本人会、農業組合、県人会、婦人会、日本語学校、日本文化協会等が存在していた。

# 1980年代、日本人移住者によるアマゾンでの 日本文化活動

- 新年会、カラオケ大会、弁論大会、運動会、演芸会、スポーツ大会、相撲大会、野球大会、ソフトボール大会、日本語学校の学芸会、日本映画上映、紅白歌合戦上映、等
- 日本人会会報、日本人会名簿の発行。
- 日本語学校での文集の発行。

- 1980年代のアマゾンでの日本人移住者の日本文化活動は、日本人、日系人を対象にしていた。現地のブラジル人は、ごくわずかで飛び入り参加する程度。
- 様々な活動費は、日本人移住者の会費、寄付、日本国からの援助。

# 報告者が参加していた行事

- 日本語学校の学芸会
- 日本語弁論大会
- 紅白歌合戦の上映

## 家庭での教育

日本の幼児雑誌や絵本を取り寄せてもらっていた。母親は毎晩読み聞かせしてくれた。

# 1990年代、アマゾンでの 日本文化普及

- 90年代、ブラジル人から日本が注目される。
- 日本語を学ぶブラジル人が増える。
- 日本語が話せない二世が増える。
- 日本文化をブラジル社会に向けて紹介することが目的となる。
- 日系人社会の刊行物はポルトガル語欄が増える。

# 報告者のブラジルでの 日本文化紹介

- 学校のグループ研究や、文化祭で日本をテーマに発表。
- 日本語学校の講師として、子どもたちに日本語、折り紙、歌、お遊戯を教える。
- 日本語教材の作成、イラスト提供、工作キットの作成。

# ブラジルでの仕事

- 農業研究所でブラジル人と日本人研究者の通訳、翻訳、資料作成補助。
- 日本人専門家のブラジルでの通訳。
- ブラジルに転勤になった日本人家族のポルトガル語家庭教師、生活サポート

日本人とブラジル人では考え方や、言い回しが異なり、お互いのプライドを傷付けないように伝えることに苦労したことも。

# 2000年代以降の日系人社会

- ポルトガル語が主流になる日系人社会
- ブラジル社会に日本文化を紹介する活動
- 日本文化のイベントはチケット制に
  
- 日本人的生活維持のための日本人会から、ブラジル社会に向けての活動、日系人アイデンティティ形成のための日系人社会へ。

# ブラジルでの報告者の意識

- 報告者は、ブラジルでは容姿からも日本人だと判断されていた。
- おおげさのようだが、常に「日本」を右肩に、「日系人社会」を左肩に、ブラジルを背中に背負っているような重圧を感じていた。
- ブラジル社会では、日系人として、また祖国日本の誇りを汚すことのないような行動を心がけていた。
- 日系人社会では、家族に恥をかかせることのないように行動を慎んでいた。
- 日本人にはブラジルのよいところを理解してもらえよう一生懸命だった。

# 日本で留学生としての体験

- 1996年に留学生として来日、1年の日本語教育期間を経て、学部留学生に。
- 「ブラジル人」だというと、日本人からも、留学生からも驚かれ、「日系人」だと伝えると、「ああ、日本人ね」と言われ、複雑だった。  
日本で街を歩くと、日本人に同化できるのが、新鮮だった。
- 「ブラジル人」とも「日本人」とも断定できず、場面によって演じ分けるようにしている。

# 「ブラジル人であることを隠す」

- 日本での大学生生活を送る時に悩んだのは「ブラジル人」であることをアピールするか、「日本人」の部分を全面にするか、だった。

「毎年カーニバルで裸で踊るのか？」「ピラニアを食べるのか？」との質問に飽きていたので、まずは日本人の振りをして友人をつくることにした。

「ブラジル人」であることを伝えないことで得すること

- 先入観がなくなるため、自分自身をみてもらえる。
- アルバイトの電話応募で有利。
- 不動産事務所で有利。
- 人間関係がスムーズ。

# ブラジル人であることをアピール

- ブラジル人の部分を隠していると、記憶喪失の人間のようになる。
- 留学している意味がなくなる気がし、ブラジル人の部分をアピールする。
- 自分の生まれ育った国のことを知ってもらいたいという気持ちが強くなる。

# ブラジルをアピールする活動

- 大学祭や向島学生センターのお祭りで、ブラジル料理を作る
- 平成14年京都府名誉友好大使に任命され、小中学校を中心にブラジルを紹介する活動をする。
- 在日ブラジル人児童生徒が通う学校で、翻訳、通訳、サポート業務を行う。

# 在日外国人市民としての活動

- 職場では、特にポルトガル語関係の仕事でない場合は、日本人になりきる必要がある。
- 世帯を持つと、学生の頃と違い、地域とのかかわりが増える。子連れだと声をかけられる。保育園や小学校、自治会の子供会への参加など。
- 自治会の仕事。外国人住民との共生には自治会は重要だと感じた。柔軟な対応が可能。

- 我が子に自分の国のことを教えるために、地域をまきこもうと考えている。
- これまでは依頼があれば、ブラジルを紹介する活動をしていたが、自ら企画してイベントをしたいと考えるようになる。
- 日本とブラジルをつなぐ「アサイーの会」を立ち上げる。

# アサイーの会

- 「アサイーの会」は、ブラジルと日本に関する情報交換をしたり、言語や文化について学習したりして、交流を深める会です。
- 現在は、日系ブラジル人、ブラジルに親戚や友人がいる人、ブラジルを訪れたことがある人、日本に親戚がいるブラジル人、ブラジルに興味がある人等で構成されています。
- 主な活動としては、年に一度、ブラジル紹介を目的とする「ブラジル展」の開催、希望者へのブラジルポルトガル語学習、
- ブラジル料理の実習と試食、講演、文化紹介、ブラジルに関する資料の貸し出し等があります。

# 主な活動

- 2012年より京都市伏見区にて希望者へのポルトガル語学習。
- 2012年より不定期で、希望者へのブラジル料理の実習および試食会。
- 2014年より小学校教諭、ポルトガル語講師への資料貸出。
- 2014年3月 KOKOKAにて「ブラジル展～ブラジルを旅して」を開催。(京都新聞掲載)
- 2015年3月 KOKOKAにて「ブラジル展～ブラジルの色彩」を開催。(京都新聞掲載)
- 2015年5月京都府国際センターにてパネル展「ブラジルの色彩」を開催(京都新聞掲載)

# 家庭内多文化環境

- 中国、ブラジル、日本、途上国、先進国、原生林、大都市、社会主義、資本主義、共産主義、軍事政権、民主主義、一党独裁政治、超インフレ、デフレ、日常的犯罪、マジョリティとマイノリティの立場を経験している両親を持つ子供。